

法然上人讃仰会

2010

monthly
JODO

November

浄土

法然上人
浄土

天国の ばあちゃんへ

ばあちゃん、

天国の 暮らしは どうですか？

自由人の 気分は どうですか？

きつと 最高でしょうね

私たちは 今 ばあちゃんが 天国に行つて 寂しいです。

とっても ばあちゃんが 恋しいです

だからといって 楽しい ばあちゃんの 生活を

束縛したくは ありませんが ばあちゃんが 恋しい

そーだ、ばあちゃん。

お散歩がてらに 私たちに会いに 来てください

明るい声で そつと 話しかけてください

ばあちゃんが 迷わないように

たくさん の 愛が咲いた 花籠と 黄林檎と 珍しい物と

楽しい笑顔や 笑い声を

いっぱいにして 絶やさないでおきます

表紙の人と書

北村宗介・書家

『浄土』2010年表紙の

1958年静岡県生まれ。北海道大学卒業。書詩家木村三山に師事、書、篆刻を学ぶ。宮部みゆき著『孤宿の人』、火坂雅志著『軍師の門』、第140回直木賞受賞山本兼一『利休にたずねよ』等、題字揮毫多数。筆一本書法ライブ「辻書法」を各地で公演。

11月の書

そくとくおうじょう

即得往生

だから間違いなく往生できます。

何の心配も要りません。

極楽の世界に往生したいと願い、

お念仏を続けていれば、

この二つのことだけで、どんな人でも往生できるのです。

そう、お釈迦様はおっしゃっています。

(編集部)

浄土

2010/11月号 目次

NHK『こころの時代』を終えいま法然上人に思う…町田宗鳳	2
会いたい人 横内謙介さん③	関 容子 12
江戸を歩く第36回	森 清鑑 20
法然上人をめぐる人々⑥	石丸晶子 30
響流十方	袖山榮輝 38
Jフォーラム	47
浄土誌上旬会	選者=増田河郎子 48
マンガ さっちゃんはネッ	かまちよろう 50
編集後記	52
表紙裏 茜の詩	新納 茜
背表紙裏 教えと法話	生野善應



表紙題字=中村康隆前浄土門主
 アートディレクション=近藤十四郎
 協力=迦陵頻伽舎

【法然上人鑽仰会●講演会】平成二十二年六月二十五日

NHK『このころの時代』を終え、

いま

第二回

法然上人 に思う

町田宗鳳

小説『法然の涙』を書いて、やっと法然さんのみ心というものが感じられるようになってきました。それまでは、学者として、法然の思想の本質をつかみたい。比較宗教学的にも、キリスト教と対比しても、大変大きな存在であったということをアカデミックに証明したいという一心で、法然さんの研究をしていたわけですが、最近私は、そういうようなことはもういいと思うようになりました。

今までは平面上で、法然の思想を論理的につかもうとしていたわけですが、小説、フィクションとなると、事情が異なります。時代小説ですから、最小限の資料は調べますが、あとは私のイマジネーションで書いていくよりし方がないのです。私の心にある法然さんを書いていかざるを得ないのです。ある意味、今やっと法然さんと正面から向かい合った感じですよ。

そして、ようやく平面的ではなくて、立体的な法然さんが見えてきたわけです。どういふお方だったか。だれと、どういうときに出会って、どういう言葉を交わされたかというようなことを、想像せざるを得ないわけです。それには、法然さんが私に憑依（ひきよ）してきたような状況にならないと書けないわけです。突き放して見ていたら書けません。そうすると、法然さんの体の温もりのようなものが、ますます身に迫ってきました。

法然さんはいともと学問もない念仏聖だったわけではなく、智慧第一の法然房と言われようなすこい、膨大な仏教経典の知識をお持ちの方でしたし、また恐らく、学問だけではなく、叡山では常坐三昧とか常行三昧とか、天台宗の伝統的な行がありますから、そういうものはお若いときにこなしておられると思うのです。

ですから、学問的にも、修行の上でも、やるべきことはやった上で、『一枚起請文』に

あるように、「一文不知の愚鈍の身になして」という境地に到達されているのです。これは、すごいことです。知識も体験もあるのに、そういうものも引っ込めてしまつて、全く無心無我の境地で南無阿弥陀仏と称えておられたわけですね。

人には一念十念のお念仏でお浄土に行けますよとおっしゃっていましたが、法然さん自身は全く空の境地、無我の境地でお念仏しておられたと思うのです。だから、念仏を称えるとは、生死を離れることだということを繰り返し、おっしゃっていたのです。

法然さんの念仏を聞いた人は、お説教を聞かなくても、法然さんのお声を聞いただけで「救われた」と思う人がいっぱいいたのではないのでしょうか。決して大きい声でされておられなかったと思いますが、そのお声に救いが実現しているのです。

そして、お言葉も常に明晰でやさしかったし、だれだって法然さんのおそばにいたくなくらい、好きになつてしまつたのではないのでしょうか。お会いするだけでほっとするかどうか、思わず笑みがこぼれてくるというか、ありがたい存在だったはずですよ。

禅宗のほうで「十牛図」というのがあります。ずつと行方が分からなくなつた牛を探し回り、家に連れ戻す話ですけども、最後の第十図は「入塵垂手」といって、本当に境地が円熟した人は、一切偉そうぶらずに、巷に入つて、普通の凡人として振る舞う。それで人の救いになつていくのだというような境地です。それを禅宗のほうでは痴聖人と呼んでいます。法然さんは、完全に痴聖人の境地に達しておられました。

禅宗のほうでは、坐禅を通じてそういうところへ行くわけですが、法然さんの場合は、称名でそういう境地に到達されたわけですね。ですから、理屈を語らずして人を救う力をお持ちになつていたと思うのです。特に、四国に流されるころなんて、本当に境地が円熟し

ていたのではないかなと思います。

声の力

私が一つ注目しているのは、やはり、声の力ということです。NHKテキストにも何度も書いていますけれども、人間の持つ声の力というのはすごい癒しの効果というか、我々が考えている以上の力があります。

ですから、六字の名号を、「心の底より真実に、うらうらと称えなさい」とおっしゃっています。あのお言葉が、私はいちばん好きです。

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏というのは、本当に誠心誠意、できたら大きな声でお称えしなさいとおっしゃっているのは、法然さんが声の力にお気づきだったのです。

実はこのことは、私自身が現代版の念仏を編み出してやっているのでわかったことです。私もいろいろ、禅の修行をしたり、キリスト教の勉強をしたり、あるいは、お念仏をしてみたり、お別時なんかも何回かしたことがあるのですが、現代人にお念仏を薦めるには、どうしたらいいかということはずっと考えてきました。

それに、形通りの坐禅を組んでも、なかなか無心無我の境地に入れるものではありません。鎌倉の建長寺、円覚寺に行って何日か坐禅をしてきたという人もよくいますが、本当に坐禅ができたかどうかというと、疑わしいものです。格好だけの坐禅なら、だれだってできます。

私は二十年という歳月を棒に振った人間だからよくわかるのです。臨済宗の京都の本山

の修行というのは相当厳しいです。しかしそういうことをやっても、なかなか心のまなこが開かないわけです。

それではどうしたらいいのかということをやつと考えてきて、特に、今は信心がない人が多いわけですし、そして、仏教徒だけじゃなしに、クリスチャンやイスラム教徒にも私はよく接触しますから、こういう人にもお念仏の心を伝えるにはどうしたらいいかということをやつと考えてきたのです。そしてそこで出てきたのが、「ありがとう」という言葉を朗誦する感謝念仏です。これには宗教色は一切ないし、外国人でも「ありがとう」という言葉は知っています。坐禅と組み合わせ、横隔膜呼吸をしながら念仏をしてみようということ、感謝念仏を始めたのです。これは、私は三年ほど前に思いついて、今では毎週のように、東京から広島までの七都市でやっています。

やってみると、驚くべき効果が出てきたのです。軽いうつ病なら、すぐに脱却してしまします。抗うつ剤を何年も飲んでいた人も、飲まなくてよくなったということがよくあるのです。それは私が何かお説教して励ましているわけではなく、自らの声の力で癒されていくのです。

感謝念仏とは、「アリガト」の四音を長い息で発生するわけですが、これを二十分もやっていると、温泉にでもつかっているかのように、ほっこりした気分になってきます。

坐禅で、数息観で呼吸を十から十まで数えるとか、面壁しながら、意識を鼻の頭に置いたり、そういうことをやるのですが、素人の人にそんなものは、全然無理です。雑念がわーっと出てきて。足は痛いし、眠たいし、腹は減るし、寒いし、ろくなことないです。

坐禪して大体、何になるか知っていますか？ 痔になるのです（笑）。

そういう不健康なことをやってもしょうがない。どうしたらいいかというのを考えたら、一応は足を組んで、安定性がありますから、今のうちに深い呼吸で発声していったいいのではないかと思ってやってみたのです。すると、私も驚いたのですが、本当に皆さん元氣になっていくんです。体も心も元氣になります。

今もし、ここで三十分やったら、この中の三分の一の人は、必ず音楽を聞きます。どんな音楽かわからない。鈴の音とか太鼓の音か、トランペットか、パイプオルガンか、笙しょうの音か、お経を聞く人もいます。

何でそんなことが起きるのかというと、これもやはり科学的に説明ができます。母音を長い息で発声すると、高周波音が出てくるのです。

今、私の声は二十キロヘルツ以下だから、皆さんの耳に到達しているわけです。人間の聴覚は二十キロヘルツ以下しかキャッチできません。ところが、自然の中、森とか川のもとを歩いているときは、百キロヘルツ以上の音を聞いているのです。

それは音として聞いているのではなく、振動として聞いて、その振動が脳幹を揺らして、脳内物質を出すのです。セロトニンとか、ベータエンドルフィンとか、ドーパミンもそうです。そういうものを出して、人間の精神のバランスを保っているわけです。

セロトニンがなくなれば、いっぺんにうつ病になります。セロトニンを出すには、歩くのが一番いいそうですけれども、高周波音を聞いてもいいのです。

私は気がつかなかったのですが、感謝念仏を集団でやったら、必ず百キロヘルツくらいの高周波音が出てくるのです。そうすると、さっきの言ったような楽器の音を聞いたり、

自然に涙がこぼれてきたりします。うれしいのか、かなしいのかわからないけれども、ともかく涙がとまらないという現象が起きるのです。

神秘現象ではなく、脳幹が揺さぶられて、そういう現象が起きるのです。あるいは、魂が癒されていると言ってもいいのです。

そういうことをやっているものだから、ますます法然さんの称名念仏というのは本当に癒しの効果があったのだらうということが、科学的に納得できるわけです。

ですから、法然さんが実際にどういうとらえ方をしておられたかよくわかりませんが、六時礼讃とか、引声念仏いんせいねんぶつとか、比叡山では非常に音楽的な念仏が行われておりましたから、それなりにゆっくりとしたお念仏を称えておられたのではないかなと思うのです。

それから、法然さんは八十歳という長生きをされているでしょう。鎌倉時代は恐らく戦乱で殺された人間の寿命も計算に入れたら、平均寿命二十五歳から三十歳位ではなかったかと思えます。今のアフリカと同じようなものです。そこで八十歳まで生きるというのは大変なことです。

ましてや養和の飢饉とか、大変食料事情が厳しい時代でした、また地震があったり、大火があったり、台風があったりしたのに、なおかつ八十歳まで生きたというのは、私は呼吸法をちゃんとわきまえておられたからだと思うのです。長生きというのは、息が長いからです。

私の小説の中では、その呼吸法を、法然さんはある人に教わったと書いています。どなたに教わられたと思いますか？

弘法大師です。伝記の中にも、空海が夢にあらわれて対面したというエピソードがあり

ます。彼は、三密加持さんみつかけと言って身口意しんくうい三つのチャネルを通じて、即身成仏に入っていくわけです。それが真言仏教の考えです。

けれども、法然さんは、身口意という三つの複雑なテクニクが要る瞑想法を一つにしたのです。口称念仏くしょうねんぶつでいい、六字の名号だけでいいと気づかれたのです。法然さんは、念仏すれば極楽往生できるとおっしゃったけれども、あれは別名、「即身成仏します」と言われているのと、同じことです。ナンマンダブ、ナンマンダブ、ナンマンダブで即身成仏できるということを確信されたと思うのです。それを、夢の中で弘法大師からこっそり教えてもらったということにしました。まあ、ありえる話です。霊的世界ではあり得る話です。

私、法然さんが「一枚起請文」の「一文不知の愚鈍の身になして」という言葉が大好きなんです。あるいは、「愚に還りて生まる」と、浄土に生まるという意味ですが、「愚に還りて生まる」というお言葉をお使いになっています。この愚というのが本当に大事だと思ふのです。

それは、山ほど知識があつて、洗練された教養があつてもいいのです。あつたほうがいいのです。その上で、愚ということの尊さ、これを日本が世界に向かって発信していかねば、世界平和はあり得ないと私は考えているわけです。

みんなイデオロギーで衝突しています。知識で衝突しています。ですから、このままでだめなのです。愚ということ、どう置きかえたらいいのかわかりませんが、「ありのまま」という言葉でもいいと思うのです。そういうところに価値観を置いていかないと、近代文明は行き詰まる、と私は考えています。

だから、何とかして、日本独特のすばらしい心の宝、下座行とか、愚に還るとか、そういう価値観は、なかなか西洋の人にはわからないけれども、伝えていかなければいけない。この努力を怠ってはいけないと思います。

法然さんの温もりというか、愛の深さというか、人の苦悩の理解の深さ、その上で、愚になることの尊さ、これを世界に伝えていきたいと思っています。

これは私一人ですることではありません。一人でも二人でも仲間がふえてくれることを祈っているわけです。

ですから、浄土宗の専修念仏せんじゆを広めた法然上人という宗門的な狭いとらえ方をしたくないのです。人類文明の中の法然上人、大げさなように聞こえますけれども、そういうとらえ方でこれからも大いに語ってゆきたいと思っていますのです。

(丁)

プロフィール

町田宗鳳（まちだ・そうほう） 広島大学大学院教授

1950年、京都市生まれ。14歳で出家。20年間、京都・臨濟宗・大徳寺で修行。34歳のとき寺を離れ、渡米。ハーバード大学神学部で神学修士号。ペンシルベニア大学東洋学部で博士号取得。1990年から、プリンストン大学東洋学部助教授、国立シンガポール大学日本研究学科准教授、東京外国語大学教授を経て、現職。同大学環境平和学プロジェクト研究センター所長。研究分野は、比較宗教学、比較文明論。

著書は、『愚者の智慧』（講談社）、「人間は「宗教」に勝てるか」（NHK出版、ほか多数。座談会「風の集い」・「健康断食」を全国各地で開催。

●本誌おなじみの著者、佐藤雅彦師の新刊を紹介します。

また会える さようなら

浄土宗浄心寺住職
大正大学講師
佐藤雅彦・著

末期がん患者に
仏教は何かできるのか



佐藤雅彦

浄土宗浄心寺住職
大正大学講師

佼成出版社

佼成出版社 ● 定価[本体1,400円＋税]

この

いのちの本体を

語る書は、

一気に読んで

しまう名著

だと思う。

著者は僧侶となつて間なしに18歳の青年の急死に出会い、いのちのはかなさを痛感した。しかしそれは、死にゆく人に寄り添う信仰者としての第一歩となつた。

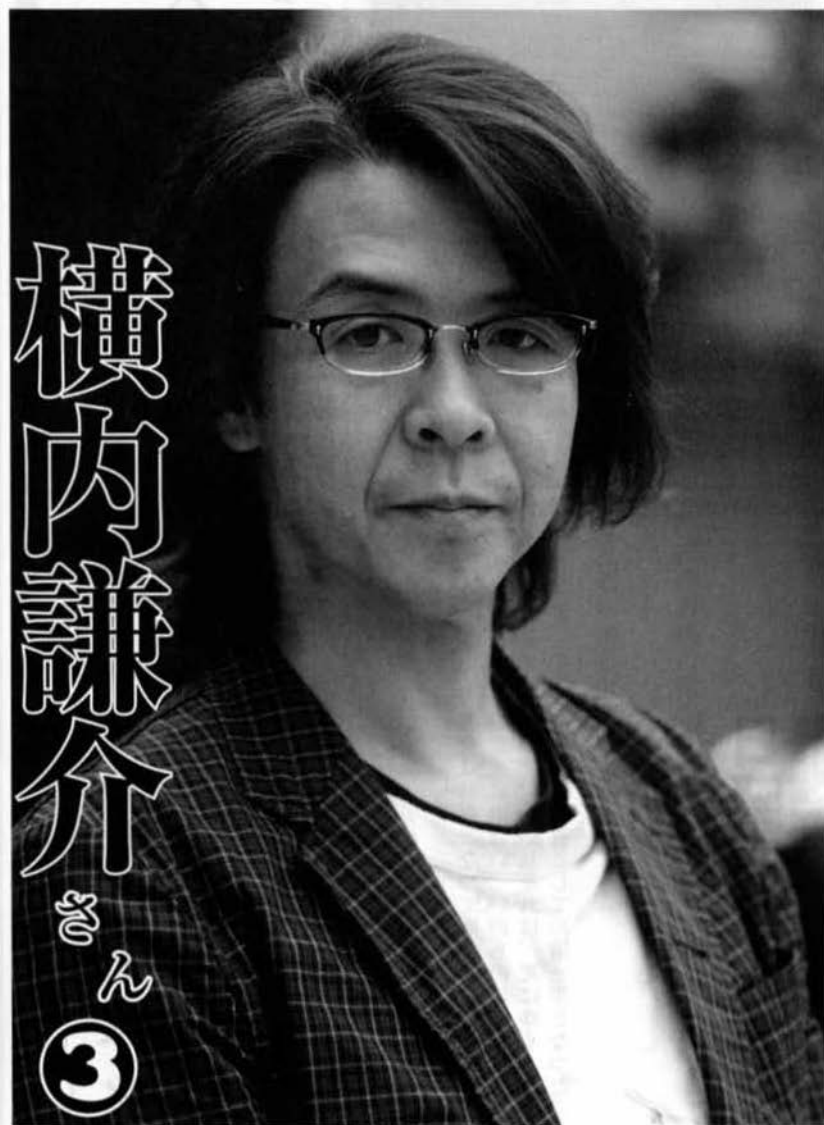
推薦！

日野原重明氏

聖路加国際病院
名誉院長・理事長

連載

会いたい人 関 容子



横内謙介

さん

③

撮影／タカオカ邦彦

横内さんの主宰する扉座の前身、「善人会議」というちよつと変つた名前のいわれは……。

「芝居を始めた頃の主流はまだアングラで、やたらにケンカ腰で偽悪的な姿勢が正しいとされていたんですね。ぼくたちはこれに逆行して『善人会議』を作ったんです。プロレスの悪役に対して、正義の味方の二枚目役をベビーフェイスというんですが、じゃあ、インチキなことを言うアングラ悪役を退治しようというんで、ベビーフェイスシアターにしようかと思つたんですが、シアターと名乗るのは野暮なような気がして。あのころ世界賢人会議というのがあつたんでそれをもじつて『善人会議』。しかしぼくたちは割と早く地方公演に呼ばれるようになって、地方でそういう名前のポスターが貼られていると、新興宗教か？ という感じになつたので、岸田戯曲賞受賞の翌年、幼名を捨てるように『扉座』を名乗つたわけです。93年のことです。扉座

のほうは、ラストエンペラーという映画の主人公・溥儀の叫ぶ「OPEN THE DOOR!」という言葉からです。当時読んだ本の中に、この叫びが今の時代のキーワードだろうというような記述があつてそこからいただきました。」

横内さんは「三木のり平の最後の弟子」と自称している。最初の出会いは90年に当時のセゾン劇場で上演された横内作品、『女殺油地獄』のときだった。

「演出がテレビ界の杉田成道監督（ドラマ『北の国から』のディレクター）で、そのころの杉田夫人はのり平さんのお嬢さん、と言つても血はつながってなくて複雑なんです。その縁でのり平さんが監修についてくださったんです。杉田さんが映像の人で舞台のことに疎かつたおかげで、ぼくも側と一緒に芝居のことをあれこれ教わりました。のり平さんというと喜劇人のイメージが強いですが

ど、実は一番大事に思っていたのが新劇で、俳優座の千田是也さんの元で舞台美術を勉強なさったこともあるし、俳優座の芝居の演出も手がけてます。ですから芝居については高い見識を持ったインテリで、ダメ出しの厳しさときたらハンパじゃなかったですね。江戸っ子特有の口の悪さで、ダメとなったら徹底的にこきおろす。絶叫する役者には、セリフを表の人間に聞かせてどうすんだ？中のお客に届けなさいよ、とか、ヘタなやつには自分たちが楽しむ前にお客を楽しませる芝居を覚えてくれよ、とか。若い女優が号泣しても全然ひるまずに、泣きたいのはお前さんの芝居を見せられているこっちのほうなんだけど、とかね（笑）

この毒舌家の御意見番に、横内さんの脚本は褒められた。でも照れ屋の東京人は、ストリートには物を言わない。

「稽古場で飲み会があつて、車座になったときにぼくは隣りに座ったんです。そしたら、

これは脚本が面白いからな、誰が書いたのか知らねえけど、つて。そばにいて、褒めてるぞみたいなのがいやだったんでしよう。いないと思つて言つたんだぞ、みたいなのがきつとスタイルなんだろうね。その後のり平さんからいろいろと芝居の手（演出法）を教わった中であるほどと思つたのは、たとえば時代物の殺しの場面で、出刃包丁を口にくわえたら必ず口をつぐめ、白い歯が見えると笑っているように見えてしまう、とか、やはり時代物の濡れ場で、衣裳に不慣れな若い役者たちがどうにもサマにならない、と困つてたら、女の足袋を男にじつくりと脱がせてみな、とかね。なるほど、するとたちまちその場に色っぽい空気が漂うんですね。それからこんなことも教わりました。近ごろは寄り合いの最後の手始めで、一本じめというところと一つ叩いて終り、というのが流行ってますよね。するとのり平さんが、チョンじゃお前、ペケじゃないか。手始めというのは、チョ

チヨチヨン、チヨチヨチヨンと三つ叩くのを三回やって、丸の字になる。そこへチヨンとやれば丸の字になって丸くおさまる、ってことじゃないか。一事が万事いわれがあるんだ、って言われてほんと感心しました」

素直に感激する横内さんを、難しいところのある三木のり平も可愛く思ったのだろう。立派な時計を贈られたそうだ。

「いえ、のり平さんには怒られたこともあるんですよ。猿之助一門の21世紀歌舞伎組のために書いた『雪之丞変化^{んげ}2001年』（九〇年初演）のとき、芝居がくどい、猿之助の言いなりに書くな、お前にはお前の世界があるだろう、というわけです。もともと猿之助さんは論理的で西洋的なくどいテイストだし、のり平さんは江戸前の粋を愛している。今日の芝居は苦痛でありましたね、ハイ以上、って帰っちゃった（笑）。あんなに本気で怒ってくれたのもぼくに期待をかけてくださったってだからだと思う。それで、のり平さんの四谷

のお宅へはちよいちよいアドバイスをしていただきに伺いました。最初は迷惑そうでも、だんだん興が乗ってきて、昼間伺って真夜中にまで及んでたことがあって、お前、俺の話聞いてるうちに髭がのびたね、って。それで二階に消えたと思ったら、金銀にピカピカ光る腕時計を持って降りて来て、あ、ロレックス、と一瞬喜んで裏を見たら、桃屋の七十年記念の国産でしたけどね（笑）。でものり平さんからこんなことをしてもらえるのは滅多にないことだそうで、あとでみんなにびつくりされました」

最晩年の三木のり平が別役実作品に出演して、思い入れの深い俳優座劇場の舞台を踏んだことがあった。

「のり平さん、とつても面白がつてやってましたね。モク拾いをしながら下手から出てくるんですけど、出てくるまでにずうっと道があったんじゃないかと思えるような歩き方で、力の抜け具合が絶妙で、独特の感じがあ

つて、せりふもいつもみたいにいいい加減なこととは言わないし、真面目に演じてました。楽屋を訪ねると、来たな、つて言つて、これ面白いかなあ、なぜ俺がこんなこと言わなきゃいけないんだ？　なんて、別役さんが向うにいるのに言うんで、ヒヤヒヤしてね。それからじきに、飲みに行こ、と言われてほつとしました。別役さんの芝居はベケットの不条理劇とよく比較されるけど、ベケットの『ゴドーを待ちながら』なんて、二人の人間がただただゴドーという人物を待ち続けている、つていうおかしい芝居ですからね、これ、最高のキャスティングはチャップリンとキートンだと言われているんですよ。のり平さんはどちらかと言えば、シニカルな感じがキートン的です。だから別役作品にじつにうまくはまっていました」

三木のり平はこの芝居に出た翌年、平成十一年一月、突然のようにこの世を去った。

今年五月、扉座45回公演『神崎与五郎東下り』に猿之助一門の市川笑也が参加すると聞いて、座・高円寺へ観に行つた。笑也の役は大衆演劇界の大スター。そこに、元は一座にいて今はタクシー運転手、毎夜酒に溺れ、荒れている男（六角精児）と、彼をもう一度舞台に立たせるために頑張る昔の兄弟子（岡森諦）がからむ。赤穂義士外伝の題材をひとひねりもふたひねりもして、皮肉でほろ苦い現代版人情噺に仕立て上げてあり、さすがに面白かった。

私が行つた日の客席に、猿之助の姿があつた。

「久しぶりの小劇場公演で、しかも日本劇作家協会プログラムという立派な枠に並べていた。だくのに何を書こうかと思案してたら、あるとき相談したわけでもないのに猿之助さんが、『神崎与五郎東下り』という面白い講談があるから、こういうのを劇団でやれば？　つて。それで笑也さんのスケジュールを伺つ

1992年『東京マネキン』での打ち上げ。後列中央が横内さん。



てみたら偶然この時期だけ空いてた。笑也さんを迎えて中途半端な時代劇にしたら失礼だし、つまらないし、いつそ現代服で登場する場面も設けて、小劇場ならではの趣向に満ちた野心作にしなければ、とウンウン唸りながら書いたんです」

笑也は『おやまルンバ』という歌謡曲で一躍人気者になった大衆劇一座の花形役。すつきり決めたスーツ姿に花があり、主役の一人として光っていた。

終演後、笑也さんに訊いてみる。

「普段とまったく勝手が違って、まず私のせりふのろさがショックでした。本読みの録音を聞いてみたら、自分だけが棒読みで(笑)。だいたい私は不器用で、師匠(猿之助)に抜擢していただいた当時も、なかなか応えられなくて、ぼく(猿之助)とお客さんが我慢し

て待つてんだから、早くうまくなってくれなきゃ困るんだよ、って言われ続けてました。今日もいろいろ注意されたあと、面白かった、とおっしゃっていただいて、嬉しかったです」

横内さんが言う。

「笑也さんは自分は不器用だと言ってるけど、それだけに獲得してつたものが確実なんです。うちの劇団員は昔の小劇場の名残りで、動きながらもつと早くもせりふが言えるんで、笑也さんとテンポが合わない。でも彼が日々変って行つて、今でも変り続けてる。ごく自然にリアルになってきてますね。稽古の段階で、こういうとき歌舞伎ではどうやるの？ 現代劇ならこうやるけど、と意見を交換し合つて、お互いにすごく刺激的だったと思う。方法や形は違つても、人間の姿を描くのが芝居というもので、その根っこは同じなんだなあ、と深く共感し合えたと思うんです」

そして六角精児、岡森諦という個性豊かな俳優たちにも瞠目した。言わばこの二人、高

校時代の横内さんによつて演劇の道に誘い込まれたようなもの。六角の得がたい不思議な存在感、岡森の『東下り』の講釈一気読みのあの気迫。

「彼らにとつてはもつと別の人生があつたかも知れませんが。でも、演劇によつて味う自由と解放感は、劇薬よりも効き目がすごい。人間が自らの精神を押し殺して、何も思わずに、何ことも起らない平凡な人生を送るとしたら、こんな地獄はないと思う。一生、寝た子でいるよりも、目覚めて苦労したほうが幸せだと思ふんです。ぼくは自分を『劇薬売人』だと思つてます。これが芝居者の思想なんですよね」

（この項おわり）

11/28・29 厚木市文化会館・小ホール
12/1・5 新宿紀伊國屋ホール
劇団扉座第46回公演

『新浄瑠璃 朝右衛門く小池一夫・小島剛夕
「首切り朝」より』

第三十六回

江戸を歩く

深川木場に向かつて歩く



森清鑑

大江戸ウォーカー

小名木川

六間堀をさらに南に下ると中橋の右手、大川までが幕府御蔵かぶくらう。蔵を見ながら猿子橋を潜りさらに進むと豎川と並行して東西に流れる小名木川に出る。江戸風光明媚なこの川も一五九〇年頃家康が小名木四郎兵衛しゅらべゑに命じて開削させた運河。行徳の塩、農村地帯の野菜、東北の米などを江戸に持ち込む重要な水運であった。北斎は、大川の入り口に架かる万年橋を通して江戸の方向に富士を描く。広重は、小名木川を東に進み、南北に流れる大横川を突っ切り、中川に至る諸処で「名所江戸百景」をものにしていく。大横川を過ぎるとこれまた南北に流れる南十間川に出るが、その手前左に九鬼屋敷があり、この五本松が有名で広重も雪旦も描いている。小名木川をさらに東に舟を進めると左、北側に大島村愛宕神社があった。一時期ここに小林一茶が仮住まいしていた（現在大島稻荷神社に合祀）。やが

て中川に出る。左に中川船番所がある。これは江戸に出入りする人や物を検査する、いわば「川の関所」で重要な役割を果たしていた。

芭蕉庵

小名木川、万年橋の北詰めには、俳聖、松尾芭蕉の庵があった。雪旦は芭蕉がこの庵から、滔々と流れる大川の風情を楽しんでいるかのような絵を残している。天和元年（一六八一）、芭蕉三十八歳の時、門人鯉屋杉風きんぼうの持ち家であるこの六間堀の小庵に日本橋から移り住む。敷地内に芭蕉の木を植えたところ、大いに茂ったので、いつしか「芭蕉庵の翁」と呼ばれるようになり、ペンネームを「芭蕉」と署名するようになる。敷地面積は、間口約二十メートル、奥行き九十メートルとかなり広く、番小屋を建て直して住まいとしていたわけである。ここに日本橋以来の弟子が多く出入りし、彼らは一丸となって師の生活を支援した。そして蕉風といわれる俳句を確立す

る。蕉風十哲とは宝井其角、服部嵐雪、森川許六、向井去来、各務支考、内藤丈草、河合曾良、杉山杉風、立花北枝、志太野坡といった句界で錚々たる人達で、いずれも今日まで続く名句を残している。芭蕉の人生に旅は欠かせない。芭蕉は、ここを拠点として、しばしば旅に出る。その度に「更級日記」などの紀行文を残す。元禄二年（一六八九）四十五歳の時、博識の弟子、曾良を伴って「奥の細道」の旅を開始。七ヶ月に及ぶ旅を終え、江戸に帰る。元禄四年、京都嵯峨野にある向井去来の有名な居「落姉舎」で過ごし、元禄六年、四十九歳の時、再び江戸に戻る。元禄七年（五十才）、推蔵に推蔵を重ねて、三年がかりの「奥の細道」を完成させ、その年、再び旅に出て難波にて没するのである。去来、其角が駆けつける。遺言は、「私を木曾義仲公の側で葬って欲しい」。去来、其角ら弟子十名が亡骸を川船に乗せ、淀川を上って大津、義仲寺に到着。門弟八十人が見守る中、義仲

の墓の隣に埋葬された。以後、深川の芭蕉庵一帯は武家地に代わった。

深川清住町と平賀源内

小名木川万年橋を渡り、大川沿いに南に下る。左手の霊運院の長い壁をすぎると深川清



絶景この上ない。上之橋を潜って左に曲がる。仙台堀である。船を東に進めると左岸の仙台藩蔵屋敷堀が切れ、ほどなく海辺橋が見えてくる。この辺りの、左手、北側一帯が久世大和守の中屋敷（下総五万八千石、約一万三千坪）である。屋敷内の中央に大きな池が二つあり、その一つは仙台堀からの引水である。ここが現代の清澄庭園。久世屋敷の前の元禄期には、豪商、紀伊国屋文左衛門の所有地で、彼はこの地に庭園を造り、別荘として人々をもてなした。そして、明治の御世になると、三菱の岩崎弥太郎がここを買い取り、さらに庭園を整備。東京でも有数のスケールの大きな日本庭園を造る。その後、清澄庭園となる。現在も涼亭から眺める池の景色は別格の趣がある。

霊巖寺

清澄庭園の東を通る、江戸期、海辺新田通りを挟んだ東一帯が広大な霊巖寺とその子院



◆北斎 富岳三十六景「深川万年橋下」。
小名木川から大川に出る。対岸は浜町大名屋敷。万年橋の右側奥に當て芭蕉庵があった。

群である。靈巖寺。浄土宗、十八壇林のひとつ。もとは靈巖島に創建された。その後、この社は明暦の大火で焼失し、深川の、この地に移転して来たものである。再興にかけた珂碩和尚の功績は大きい。彼は地道な布教活動を行い、幕府から割り当てられた、この湿地帯を見事に再興した。その後、珂碩和尚は、九品仏浄真寺を建立。そこを浄土とした。靈巖寺の境内には、地藏坊正元の手になる江戸六地藏の五番目がでんと控えている。この大きな銅像は風格がある。辺りの江戸っ子は境内にある、大きなお地藏様に手を合わせ、旅に出立した。もうひとつ。境内には、寛政の改革を断行した、松平定信の墓がある。田沼意次のどちらかといえば重商、積極的な新産業勃興策と正反対の重農主義を推進。彼は八代將軍吉宗の孫であり、早くから老中筆頭の座が約束されていたが、その道を田沼に塞がれる。田沼失脚後、老中になると田沼時代の賄賂横行政治を改め、清廉な政治を目指す。

吉宗以来の質素儉約を自ら実践し、同時に江戸庶民にも強いた。当初、賛同した江戸庶民も次第に息苦しくなってくる。定信は、文武、学問も奨励。彼自身柔術の大家であり、老齢になっても技の研鑽に務めている。しかし、その学問奨励策には偏りがあり、朱子学に固



◆広重「小名木川五本まつ」。左の九鬼屋敷から飛び出した松が道を越え、川面を覆う。小名木川に行く先は中川、行徳方面。長渡船（ながわたりふね）が行き来している。

執したあまり、徳川末期の様相を呈することになる。江戸庶民の娯楽、芝居にまで否定的な処置をとる。定信は若い時から聡明を謳われ、権力の座に着くと意次の影を徹底的に払拭し、清き政治を旨とする。長谷川平藏の寄場人足作りは、定信の大きな功績である。しかし、田沼の商業勃興、経済、技術の振興策を見ると、希に見る優れた政治家ではなかったかと思われる。彼は長崎から入手した蘭学の良き理解者でもあった。時代の状況がこの優れた政治家を継ぐ人材を生み出し得なかったともいえる。一方、定信は、天明の大飢饉の影響下で放漫財政の立て直しという困難に直面する。事実、自領の白河藩では、一人の餓死者も出さず、名君と云われている。彼の質素儉約と植栽振興策は決して間違っていないと思う。しかし、当時、余人には気づかぬ新産業、技術勃興策の芽を摘んだことも確かである。この流れが幕末まで続く。定信は決して芸術を軽んじていたわけではない。彼

◆江戸名所図会 長谷川雪旦
「芭蕉庵にて、物思いにふける芭蕉」。中央、窓の外に大きな芭蕉の葉が垂れ下がっている。「古池や蛙飛び込む水の音」桃青（芭蕉の前の号）とある。



自身、谷文兆と親しく接し、芸術を重んじる生活をしている。だが、吉宗以来の質素儉約主義は、その下々の役人に芝居の禁止とか、庶民の生活の楽しみを奪う策を行わしめ、やがて庶民はあえぐようになる。次なる狂歌は当時の江戸庶民の気持ちに正直に伝えている。「白河の清きに魚も住みかねて、元の濁りの田沼恋しき」（定信は陸奥白河藩主）。

紀伊国屋文左衛門

靈巖寺表参道を歩く。寺内西側に雄松院があり面して東西に広い道がある。この道の南側は靈巖寺学寮を始め多くの子院が並び、久世屋敷の東面を南北に通る、海辺新田通りに面して表門前町の町並みが展開している。表参道をさらに南に下ると左右に並ぶ子院群の果てに成等寺。ここに紀伊国屋文左衛門が眠っている。不明の部分が多いが、元禄期を代表する一大風雲児であることは違いなからう。紀州のみかんや材木商として莫大な財を

築き、それを惜しげもなく世に還元した。彼の寄進と伝えられるものは今日でも多々ある。家運傾き全てを投げ出すと永代寺の西、富岡八幡の一の鳥居付近にひっそりと身を潜め、悠々たる人生を送った。芭蕉門下の俳人、宝井其角との交友は並の商売人ではないことを物語っている。物質欲に囚われない、その生き方に江戸人は大いなる賛辞を送ったに相違ない。成等院の東側にある小さな墓の側には、今日、同じ紀州人の大実業家、松下幸之助が寄進した大きな記念碑が建てられている。

仙台堀

仙台堀は寛永以降に開削された運河。大川に接する上之橋の北側が仙台、伊達家の蔵屋敷。そこに米、特産物を運び入れたためついた名である（明治になって、仙台藩蔵屋敷は消滅。大正の頃、仙台堀の上之橋から清澄庭園までは埋め立てられている）。大川東の上

之橋、次の海辺橋、そして亀久橋までが仙台堀で、そこから東は三十間川と名前を変え、亀久橋の次の要橋から崎川橋で縦南北に流れる大横川にぶつかる。この要橋から崎川橋までの直線をそのまま南に江戸湾州崎まで縦長方形に伸ばした広大な地域がいわゆる深川木場町である。海に町が浮かんでいる、希有な風光の景観が展開する。

木場

材木の集積地、木場は火災や江戸町の拡大発展など諸所の原因により、移転に移転を重ねてきた。そしてとどめをさしたのがこの深川の木場である。三十間川の要橋から崎川橋までの幅で南は江戸湾に至る木場町。北は広大な材木置き場が広がる（木場公園、都現代美術館）。絵師長谷川雪旦の木場絵図は当時の姿を如実に表現している。海の入江（堀割）に島（造成地）が浮かんでいるといった光景である。至る所に材木が纏められて浮か



◆江戸名所図会 雪旦描く深川木場の光景

んでいる。木々に覆われた島には材木商の館があり、明け放れた座敷では主が客と相對している。庭には横積み、縦積みの木材。池もある。島（造成地）はそれぞれ橋で繋がれている。そして此処かしこで人々は釣り糸をたれている。浮かんだ材木に乗って釣っている人、小舟を出して釣っている者。堀割には江戸湾の魚がそのまま入ってきているのである。云ってみればここは養魚場に等しい。広重は雪降り仕切る冬の光景を描いている。蓑を覆った職人が材木に乗り作業している。真に東洋のベニス。いやそれ以上の自然と人が織りなす水郷の景観。現代人がこの光景を見たらその美しさに息を呑むであろう。

【参考文献】

「江戸名所図会」角川書店

「広重の江戸名所百景散歩」人文社

「江戸史跡事典」下巻、新人物往來社。

「江戸・明治・東京重ね地図」(株)エービーピーカンパニー



◆広重 深川木場の雪景色

シリーズV

法然上人を
めぐる人々

勢観房源智

◆ 第六回 ◆

の入室

石丸晶子

挿画・鈴木奈緒

「一筋縄ではいかぬ食わせ者よ」などと陰口をいわれながらも、法然上人のふるさと稲岡莊に直実が持仏堂を建てて、三年の月日がながれた。

建久七年（一一九六）、冬の十一月であつた。

昨年の秋から、この一年あまり故郷の東国に帰っていた直実が、ひょっこりと都にもどつてきて吉水の草庵に顔をみせ、道遍や道蓮とともにふたたび別棟で寝起きしはじめたかと思うと、間をおかずに、今度は慈円のところで修行していた智丸が法然上人のもとにもどつてきた。

「何だ小僧、戻ってきたか。大きうなつて。やはり法然上人にまさる師僧はおられなかつたとみえるな」

十四歳になった智丸の顔をみるや、大声で直実はいった。つづいて彼は

「いやいや」

と手を振りながら、

「お氣に召さるな。この度の騒動のことはわれらも聞き及んでおるわ」

そういうとしげしげと智丸の顔をみつめ、やがてつぶやくように、

「それにしてもそなた、ますますよう似てきたな」

そういうと彼は、智丸から顔をそむけた。

その半時後、直実は法然上人と対座していた。

「智丸の顔をみるたびに、この目ごろ忘れていた亡き敦盛殿のことを思い出して、苦しいございます」

直実は訴えた。

草庵の障子をがたがたいわせて木枯らしが吹きすぎていく。

ひとしきり、風に木々の葉が舞い散る音が聞こえてきた。

「智丸は石清水八幡の宮司の子息ときいてお
ります…」

日ごろにも似ず、直実は口ごもった。

「—このようなことを師僧に伺いますのはど
うかと思いましたが、智丸はまこと宮司の家
の子息なのでありましょうか」

思いがけない直実の問いであつた。

「—或いは平家にかかわる家の子息ではない
かともふと思つたりいたしまして…」

一瞬、お心のうちで法然上人はハッとされ
た。しかしお顔色は変わらず、直実をまつ
ぐにお見つめになると、

「智丸は石清水八幡宮の宮司紀氏ぐうじの子息です」

直実をハッとさせるきびしい口調であつ
た。そのお姿と口調には、ひごろ直実が知つ
ている温厚な法然上人はおられなかった。そ
れ以上のせんさくを直実に許さぬ、きびしい
法然上人がそこにはおられた。

「さらにまた、出家した身にとって出自は関
係ありますまい。武士の出である法力房ほつりきぼう（直



実)も、公家の出である法蓮房(信空)や善ぜん

恵房(証空)も、宮司の出である智丸も、出家した以上はみな仏弟子として等しいのです。わたくしは誰がいかなる家の出であるか、考えたことはありません。出自のせんさくなど、まったく無用のことです」

「われらの不徳のいたすところでございました……」思わず膝を正して直実は口ごもりながら、

「実は昨年の秋、智丸がはじめてここ吉水にまいりましたとき、面影にどここのう敦盛殿を思い出させるもののごじまして、その時は他人のそら似と思い過ごしたのでございますが、このたび慈円様のもとからもどつてきた智丸にさきほど会いましたところ、十七歳で討ち死にされた敦盛殿と年ごろも似てきたためか、ふたたび昔を思い出したしだいでございます」

法然上人にたしなめられて直実は、豪放磊落ごうほうらいらくな日ごろにも似ず、くどくどと言ひ訳のこ

とばを連ねた。

二

面影に敦盛を思い出させるものがある、と直実がいうのもそのはず、赤児のときから石清水八幡宮司一族の息子として育った智丸であつたが、実は平家の嫡流重盛しげもりの末子師盛もろもりの、彼はただひとりの忘れ形見なのである。

そして敦盛とはいえば、彼は智丸の祖父重盛の従弟であつた。

それまで、自分が清盛の曾孫とはしらず、石清水八幡宮の宮司紀氏一族の息子智丸として生きてきた彼が、生きるか殺されるかの重大事件に襲われたのは、直実が法然上人に源智の出自をお尋ねした日に遡ること一年あまり前の建久六年(一一九五)の春。

智丸は十三歳であつた。

その年三月におこなわれる東大寺大仏再建法要に、正室の政子や嫡子頼家よりいへ、そして長女大姫おおひめらとともに出席することになった頼朝

は、雲霞のごとく多数の武士をしたがえて二月に鎌倉を出立。上洛の途についたが、上洛の折には石清水八幡宮にも参詣すると伝えてきたのである。

石清水八幡宮は源氏の氏神をまつる神社であり、鎌倉の鶴岡八幡宮は石清水八幡宮が鎌倉に勧請された社であった。つまり、格の上からいえば、石清水八幡宮こそが源氏の氏神を祀る本宮であり、鶴岡八幡宮よりも上位に位しているのである。

源氏の総大将頼朝一行が参詣するとなれば、宮司一族は勢ぞろいして出迎えなければならぬ。

頼朝一行の参詣を聞いた智丸の母美子はあわてた。事情をしるものは美子と美子の両親である宮司の紀祐清夫妻、そして乳母しかいなかったが、鎌倉将軍を出迎えるとなると、もちろん、智丸も将軍の前にでて挨拶しなければならなかった。

智丸だけが挨拶の列にくわらないとすれ

ば、かえって周囲の人びとの不審を買うであろう。

しかし、頼朝の前に出たとき何事もなくすめばよいが、何か不測の事態が起きないともかぎらないのである。現に今なお、平家の残党狩りはつづき、京都市中や地方に隠れひそんでいた平家ゆかりの男たちが幕府の手で処刑されているのだ。

万が一、智丸の存在に疑いをいだく者がでてきたならば、一体どうすればよいか。

美子是不安で一杯になった。

そしてその不安は、智丸が頼朝の前に挨拶にでたとき、頂点にたつたのである。

鎌倉幕府の将軍は智丸をみてこういったのだ。

「なかなかよいお子だ。どこのうみやびな姿は、さすが都のお子よ。われらが都にいたころの公達きんたちが思い出さるる」

頼朝としては、他意なく口にしたことばであつたろうが、美子には一つ一つが心に突き

ささった。

「―都にいたころの公達きんだちが思い出されるとは、
どういう意味なのであろう。もしかすると、
將軍家は気づいたのではないか」

美子はおびえた。

「父上」

参詣をおえた頼朝一行が石清水から都の宿
舎六波羅ろくはらにむかった夜、美子は父の宮司と向
かいあっていた。

三

「將軍家が智丸をみて仰せになったことばを
いかが思われますか。わたくしは不安でなり
ませぬ」

「まさか智丸の顔一つで、気がつかれたはず
はななろうが…」

「公達のような、といわれたおことは心が
刺さるのでございます」

「しかしあのとき、万が一気がつかれたのであ
ったならば、智丸はその場で捕らえられてい



ようぞ」

「……」

美子はすすり泣いた。

と宮司はすすり泣く娘の顔をひたとみて、

「美子、智丸も十三になるな。これが武家ならば元服もしよう年であるが」

「これから先のことを思うとわたくしは夜も眠れないのです」

「ふむ」宮司は腕を組んで、

「どうだ、智丸をどこかしかるべき寺にあずけないか。石清水は源氏の氏寺なれば幕府の侍の出入りも多い。いつまでもここにおいておくのは危険であろう」

「――実はわたくしもそのことを考えておりました。明日にでも寺に預けとうございます」

「いや」

宮司はいった。

「將軍家が都に滞在しておられる間は動かないほうがよい。あわてて普段とちがうことをすればかえって疑われようぞ」

三ヶ月ほども都に滞在していた頼朝一行がようやく帰途についた六月末、美子は開け放った奥の広い一室で父とともに智丸に向かいあっていた。実は頼朝一行が都に滞在中の四月にも、平家の残党薩摩宗資父子が洛内で捕らえられ、処刑されていた。

「智丸、これから母が申すことをよく聞きなさい」

美子はいった。

「今までそなたにも隠してきましたが、そなたの父は先の内大臣平重盛様の末子師盛様なのです」

「……」

一瞬、十三歳の少年は顔色を変えて母をみつめた。

「その昔、母は内大臣様ご一家がお住まいの小松殿にお仕えしていました。そのとき、師盛様のご寵愛をいただいてそなたを身ごもったのです」

「……」

少年は血の気のひいた真剣な顔で美子の顔をみつめつづけている。

「しかしそなたが生まれたとき、師盛さまはすでにご一族とともに西海^{さいかい}に赴いておられ、そなたが生まれたことさえご存知ではありません」

美子ほこみあげてくるものを抑えるように、智丸から目をそらして開け放った障子のかなたをみていたが、

「そなたが生まれたことをお知らせするすべもないままに、まもなく一の谷で討ち死にされました」

あれを思い、これが思い出され、長年抑えに抑えてきた悲しみが怒濤のようにこみあげてきて美子は嗚咽した。

「一の谷で討ち死にされたのも、名もない平氏のお侍をかばったためであつたと、あとで母はききました」

「……」

十三歳の智丸の目に涙がひかった、と思うや智丸は泣いた。齒をくいしばり声をこらして泣いている。少年の目からは涙が次からつぎへとあふれた。

「そなたの父上は立派な武将でありになつた」

美子も涙のなかから、

「そなたも父上に恥じない人間にならねばなりません。そこで母はお祖父様^{じい}とも相談して、そなたを吉水の法然上人のもとに預けることにいたしました。いいですね」

「母上」智丸は母をよんだ。

「わたくしは石清水の神官となつて、母上やお祖父様^{じい}のもとで生きてまいる心でおりますが」

「なりません」

美子はするどい声でいった。

「なりません。ここにいることはなりません。仏道出家して生きるほか、そなたが生きる道はないのです」

称讃浄土經には、慈悲をもてくわえたすけて、こころをしてみだらしめたまわずととかれて候なり。ただの時に、よくよく申しおきたる念仏によりて、臨終にかならず仏来迎したもう。仏のきたり現じたまえるをみたてまつりて、正念には住すと申しつたえて候なり。

法然上人「大胡の太郎実秀へつかはす御返事」

『称讃浄土經』には、「阿弥陀さまは、大いなる慈悲を働かせて、私たちの心を乱れないようにして下さる」と説かれています。このように、日ごろから懇ろに称えてきたお念仏の功德によって、臨終にあたって必ず阿弥陀さまが来迎して下さいのです。そのお姿を拝して、はじめて安らかな心になるのである、と説かれています。

野球、好きかい？

それは、映画『フィールド・オブ・ドリーム』で、主人公レイ・キンセラが自身のトウモロコシ畑を取り潰して作り上げた野球場に集う、一九一〇年代に活躍したかつての大リーガーたちの亡霊が手にするような、手袋をちよっと大きくしたようなグローブであった。

これまた年代物の使い込んだバットや古ぼけたスクラップブック、練習メモかスコアブックらしきノートとともに、ある秋晴れの朝、翁の棺に納められた。

喜寿も過ぎ、お年でいえば確かに翁だが、長身で、胸板が厚く、大きな声で、親分肌で、いつまでも若々しく、人の輪がまわりに絶えないような人だった。新しく独立した所帯であったから、お寺との付き合いは、本家の仏事が主な舞台であったが、人なつっこい性格ながらも、いかにも数々の武勇伝に彩られていそうな雰囲気漂わせていた。

一見してスポーツマンと分かる翁は、若かりし日、白球を追いかけていたそうだ。高校野球の選手であったのだ。通夜の席上、ご兄弟たちがビール片手に、懐かしげに、また自慢げに選手時代の翁を語り出した。時系列と記憶が曖昧なままの断片的な話であったが、私なりに理解したところはこうだ。

夏の県大会であったか、秋の北信越大会であったか、ともかく決勝か、準決勝であった。翁は三塁手であったそうだ。何イニング目だかは分からないが、三塁側ベンチに飛び込んでいくようなファールがあった。翁は必死に追いかけた。そのアウトが勝利を引き寄せる。そういう状況であつたらしい。だが、翁は捕り損ねた。案の定、そこから試合が動いた。流れは相手に傾き、そのまま翁のチームは敗れ去り、甲子園を逃した。帰宅した翁は泣いていた。後にも先にも、翁が野球で泣いたのはその時だけらしい。泣きながらグローブを見つめ、今度はもっといいグローブを手に入れてやると言っていたそうだ。指先に、グローブの先端からボールがはじかれていく感触が残っていたのだらう。

その後、翁には東京六大学の野球から誘いがあつたそうだ。お馴染みの大沢親分のチームメイトか、ミスターGの先輩になっていたかも知れぬという。そこがご兄弟の自慢であつたが、やがて、家業を手伝うことになった。

翁から高校野球の話は聞いたことがある。けれども、誰々のヤジはどうだったみないな話で、自分が選手だったと聞く機会は私にはなかった。でも、ご兄弟によれば、棺に納めるべく翁の傍らに添えたグローブは、あのファールを捕り損ねたグローブだという。型は古いが、遠目にも見事に手入れが施されている

るのが分かった。六十年以上も昔の代物にだ。

翁の高校野球は何年経っても、とても大切な思い出なのだ。誰にも土足で踏み込んでもらいたくない宝物。だから翁は、ペラペラ話さなかったのだ。

日ごろ念仏を称える者の臨終には阿弥陀さまが来迎してくださり、安らかな心にして下さるという。でも、安らかつて、どこか抽象的な言い方だと思う。

この翁なら、お迎えに来た阿弥陀さまにだって、大声で遠慮なく聞かだろう。

「如来さんは、野球が好きかい？」

阿弥陀さまは何と答えるだろうか。

「あの試合、いい試合だったよ。ファールを捕りに三塁側のベンチの突っ込んだ三塁手がいたけど、あれが野球だよ。野球はあじゃなくっちゃ」

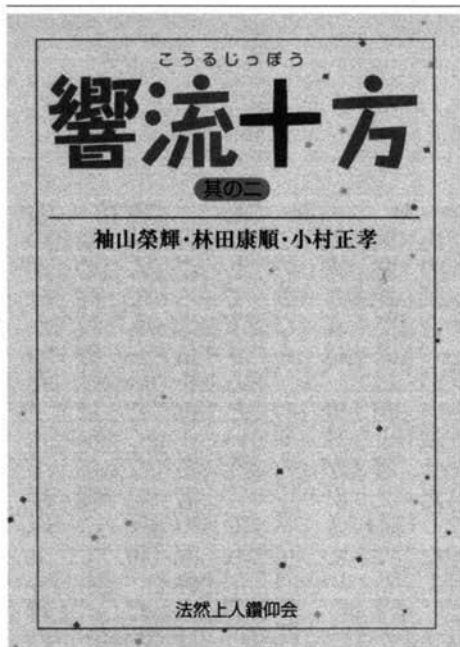
翁にも、この世に心残りはあるだろう。でも、大切な思い出を大切にしてくれる仏さんからのお迎えと分かれば、「思い出は消え去りやしない。これなら、安心して逝ける」と家族を見ながらニヤッと笑うに違いない。磨き上げられた翁のグローブを見て、そう思った。

（浄土宗総合研究所 袖山榮輝）

響流十方 其の二

こうるじっぽう

著 袖山榮輝 林田康順 小村正孝



法然上人鑑仰会
定価[本体640円+税]

本誌連載の「響流十方」が「其の二」として再び一冊の書籍にまとめられました。思えば「差出人は法然さん」そして『響流十方』の一冊目を上梓された頃の著者三師は浄土宗の若き俊英。現在もそれぞれ鋭い学僧、論客として日々充実し、おのおの浄土宗の現在と将来を背負うべき逸材です。

三師三様、豊潤なレトリックを用いながら、さまざまな経文、法句に取材し、その心を、日常の雑事に託しつつ、現代における諸問題と関連させて説くという、叙述スタイルは、まさにすべての人々に問いかける方法論として有効です。

連載中から注目を集めていましたが、こうして一冊にまとめられると読み応えが増しています。亡くなられた作家、井上ひさし氏がかつて語った「難しいことをやさしく、やさしいことを深く、深いことを面白く」書くことに成功した稀有の一書が実現したといえるでしょう。

(編集部)



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では
読者の自由な参加をお待ちしています。
詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、
TVウォッチング、紀行文、その他創作等。
あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。
どしどし編集部にお寄せ下さい。

浄土誌上句会

●夏草

〔特選〕山々に記紀の神々夏の草

古事記・日本書紀の世界である。大和の国
だろう。「山々・記紀・神々」と畳み込んで
行っているのがリズムをなしている。読みの
効果を見るべきだろう。「夏の草」は、ほか
の季語にできそうだが、これが題なのだ。

〔佳作〕夏草や目病みの猫の大欠伸

夏草の起伏円やか秋吉台

夏草を除けて作りし踊りの輪

井口 吾郎

石原 新

増田 信子

永田 博正

●冷奴

〔特選〕萩小鉢菜味多目の冷奴

萩焼きの小鉢である。白くふっくらした肌
合いが、冷奴とよく合っているのだろう。多
目というのは、生姜・葱・花鰯あるいは青紫

浜口 佳春

蘇など種類を指すのか。たつぷりというのか。この辺は読み手に任されている。

〈佳作〉

ややありて遠のく雷や冷奴

佐藤 雅子

浅草は屋台から暮れ冷奴

小林 苑を

湯浴みして一日終えぬ冷奴

井村 善也

●自由題

〈特選〉

天衣なき三保の松原蝉時雨

村上 青女

三保の松原といえは羽衣の物語である。何代目かの羽衣の松のほとりに立つと、今はただ蝉がしきりに鳴いているばかりであるという。「天衣なき」が、逆にその松に羽衣の掛かっている様子を、頭に浮かべさせる。

〈佳作〉

西瓜持ち法然さまの寺へ行く

齊田 仁

からだ中水になるほど西瓜食う

寺下 忠至

膝つきて草刈るズボン百足這う

浦田 ちゑ

浄土誌上句会のお知らせ

兼題

季節ではありません

越島自由題

誌上句会〈編集部選〉

■夏草

ありあけの夏草凜と輝けり
川緑の夏草匂う城下町
夏草や空まだ暮れず機の街
夏草に伴天連ひとり転びけり
路地ごとに更地の増えし夏の草
夏草を除けて作りし踊りの輪
夏草を分けて露天の湯に並ぶ
海を見ており夏草の風を背に

■冷奴

名山の水すずやかに冷奴

河合富美枝
佐藤雅子
中島富士子
斉田 仁
井村善也
増田信子
進藤美佐子
戸井田信司

締切・二〇一〇年十一月二十日

発表・『浄土』二〇一一年一月号

選者・増田河郎子（「南風」主宰）

応募方法

●いづれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

●葉書に俳句（何句でも可）と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

夫逝きてよりの日月冷奴
老人に恍惚とあり冷奴
中年や天下御免の冷奴
冷奴ビールの泡を鼻に付け
名水に鎮座まします冷奴

■自由題

松手入れたえて夕映えかくのごと
川舟の流れに添いて秋の蝶
待つ刻の心揺らぎてこりんどう
早や遠忌我は二度目の大師號
卒塔婆のようなアイスの棒なりし
揺れたるは都電の吊輪秋に入る
生きるものみな耐えている残暑かな
どぜう屋と大書されある秋暖簾
子規の忌の斜めにかぶる野球帽
初穀の煙る匂いや村暮るる
髪切つて風の涼しさ覚えけり
蟬しぐれ地に爪立てる蟬の殻

中島富士子
斉田 仁
工藤 掉
石原 新
新島朱音

佐藤雅子
河合富美枝
中島富士子
飯島英徳
西原規夫
工藤 掉
鈴木真理子
袴田阿形
内山 大
さとうゆう
山口信子
中村真一



盃をこぼさぬほどの寝待月

岱潤

先日火葬所の見学という、組の教化団が主催する研修会に参加させていただいた。この火葬場見学という研修を快く受け入れてくれた施設は、東京では一カ所しかなく、六年前に埋め立て地にオープンし、五つの区が共同で運営されている「臨海斎場」だけだったという。

事務局の方からていねいな説明があったあと、施設内を見せていただき、最後に火葬炉の裏側に入れていただいた。午後の遅い時間であったが四体の火葬が正になされているところで、二名の職員が二つづつ窯を担当され、忙しそうに作業

をされていた。窯は一基一億円以上もするといふもので、画面にそれぞれの進行状況が表示され、経過時間はもとより、窯の温度が刻一刻と表示され、九百度をベストとして千度以上にならないよう気を配っていた。しかし細かな調整や終了はのぞき穴から見て人間の判断で行われるということ、絶えずのぞきながら作業をしている姿に恐縮した。少しでも多くしつかりした骨を残すことを心がけ、正に緊張の連続であった。責任者の方の「ご要望があれば骨標本のように残すこともできます」という言葉に技術に対する自尊の思いも感じ取れた。作業者は最後に冷却のときに風で飛んでしまった骨

を整え、毎日窯の清掃をするという。作業されている方々に頭の下がる思いで一杯であったが、私自身は十分とその場に居られなかった。
(長)

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤
斎藤晃道
佐山哲郎
青木照憲
村田洋一

浄土

七十六巻十一月号 頒価六百円
年費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成二十二年十月二十日

発行 平成二十二年十一月一日

発行人 佐藤良純

編集人 大室了悟

印刷所 株式会社 シーティーイー

〒一〇五・〇〇一一

東京都港区芝公園四・七 四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三(三)五七八六九四七

FAX 〇三(三)五七八七〇三六

振替 〇〇一八・八・八二二八七

雑誌『浄土』
特別・維持・賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
巖谷勝正(目黒・祐天寺)
魚尾孝久(三島・願成寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
北山大超(焼津・光心寺)
加藤亮哉(五反田・専修寺)
熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
高口恭行(大阪・一心寺)
田中光成(町田・養運寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
野上智徳(静岡・宝台院)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓文(静岡・華陽院)
本多義敬(両国・回向院)
真野龍海(芝・天光院)
脇博之(網代・教安寺)
水科善隆(長野・寛慶寺)
宮林昭彦(大本山・光明寺)
山田和雄(諏訪・貞松院)
(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://jodo.ne.jp>

恵え施せ得とく福ふく

恵施して福を得
無量寿経

生野善應

亜細亜大学講師
東京高輪・光福寺住職

思いやりのある務めをして、満足する

人には、一個人また社会人の両面があります。

自らの利得を省みず、社会人としての生き方を優先する人は昔から尊敬されました。

『徒然草』第二段、「衣冠より馬・車にいたるまで、あるにしがひて用ゐよ。美麗を求むる事なかれ」、藤原師輔（960没）が子孫に残した言葉は、現代にもそのまま通用します。

一方で優れたエッセイスト兼好は乱脈な政治と

賛沢を痛烈に批判しました。

「いにしへのひとりの御世」は、政治を疎かにし、国民の愁い、国の存亡を省みない方もいたが、

「天皇のお召ものは、粗末なのがよい」との書き置き、順徳天皇（一二四二没）を講えつつ、兼好は心中で、大規模な熊野行幸で政治を怠り、遊びに耽った後鳥羽上皇を批判し、息子順徳の言葉で戒めたのです。

法然上人鑽仰会の

本

当会発行の書籍、雑誌
のお求めは、当会へ直接
お申し込みください。

なお、月刊『浄土』を除き送料は
含まれておりません。別途実費を
申し受けます。

法然上人鑽仰会

電話／03-3578-6947

FAX／03-3578-7036



響流十方 こうるじっぽう
其の二
600円(税別)

響流十方 こうるじっぽう
600円



月刊『浄土』
バックナンバー



『念佛讀本』完全復刻版
1,600円



「法然上人絵伝絵葉書」
(8枚セット)500円



「法然上人絵伝・残欠」(巻本)より
「法然上人絵伝・残欠」(巻本)より